

小林勇文集

第九卷

筑摩書房

小林勇文集 第九卷

一九八三年二月二十日 第一刷発行

著 者 小林 勇

発行者 布川角左衛門

発行所 筑摩書房

101 東京都千代田区神田小川町二ノ八

電 話 ○三(二九一)七六五一営業部

○三(二九四)六七一一編集部

振 替 東京六四四一二三

印刷所 精興社 製本所 鈴木製本

乱丁・落丁本の場合は御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

目次

小閑

1

竹影

153

雨の日

305

詳細目次

解題

口絵・紫露草

一九七八年作

詳細目次

小閑

冬の木	3
火事と乞食	4
恥	6
故郷の町	7
冬瓜	9
駅長	10
父と子	12
一枚の地図	13
独居	15
石垣	16
牛の馬糞	18
元旦	19
くちなしの実	21

21	19	18	16	15	13	12	10	9	7	6	4	3
----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---	---	---

万年筆	22
山芋	24
着物	25
漬物	27
長良川	28
丸子の芋汁	30
月見草	31
祖母の足袋	32
父の草履	34
鉄漿	35
泳ぎ	37
硯	38
筆	40
浜日傘	41
アイク	43
黒眼鏡	44
蜜蜂	46

46	44	43	41	40	38	37	35	34	32	31	30	28	27	25	24	22
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

犬の記憶	役人嫌い	茸狩	奇遇	農村の婦人達	手	九月一日	絵具	紙	墨	逃水	ネクタイ	真昼	盆踊り	農村の機械	野次	蜂蜜
------	------	----	----	--------	---	------	----	---	---	----	------	----	-----	-------	----	----

71	70	68	67	65	64	62	61	59	58	56	55	53	52	50	49	47
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

蟻	犬の鳴声	蛙	崖の上	閑資寿	毛虫	雪舟寺	看護	指物師	秋田犬	看板	寢覚の床	屋根	立秋	じゅうだま	庖丁	猫の記憶
---	------	---	-----	-----	----	-----	----	-----	-----	----	------	----	----	-------	----	------

97	95	94	92	91	89	88	86	85	83	82	80	79	77	76	74	73
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

とうもろこし	壺	老友	お寺	母の顔	赤松	髪の毛	内山完造	涙の目	城	三木清の命日	嵐	馬	平和犬	年齢	長い話	蕎麦屋の客
--------	---	----	----	-----	----	-----	------	-----	---	--------	---	---	-----	----	-----	-------

98	100	101	103	104	106	107	109	110	112	113	115	116	118	119	121	122
----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

八旬荘	三等車	夫婦	竹	煙草	新しい台所	老棟梁	柿	岩魚	アル	鮭	死	養魚	巻紙	文化の日	物惜しみ	鯨
-----	-----	----	---	----	-------	-----	---	----	----	---	---	----	----	------	------	---

124	125	127	128	130	131	133	134	136	137	139	140	142	143	145	146	148
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

雷	手紙	週刊誌	高原の野菜	風呂焚き	とうふ	露伴忌	落葉松	鯉	草刈り	カッコウ	雉	一個閑人	竹影	千字	縄飛び	
173	171	170	168	167	165	164	162	161	159	158	156	155		151	149	
朝の散歩	湖	八月十五日	写生	道	山女	徳利	水	苔	ひげ	そば	浅間山	萩	百舌	記念碑	開拓村	地蜂
198	197	195	194	192	191	189	188	186	185	183	182	180	179	177	176	174

夏の終り
 一人で
 デル
 めし屋
 水仙
 戸隠そば
 田舎家
 写真
 鐘
 画讃
 茂吉の絵
 扇子
 巣箱
 葉鶏頭
 どくだみ
 白い花
 山莊第一日

200 201 203 204 206 207 209 210 212 213 215 216 218 219 221 222 224

山莊第二日
 家事
 独り暮らし
 老犬
 稻妻
 画家長命
 劉生の仁王像
 書の敵
 母の紐
 或る朝
 再びデル
 別離
 鳩
 つづける
 懷素
 子供の病氣
 一人の兄

225 227 228 230 231 233 234 236 237 239 240 242 243 245 246 248 249

泣く 過去 姉 見送り 烏 雷鳥 上海の空 野球の思い出 持ち時間 独居について 喧嘩 ランプ 虹 赤彦 八月五日 古い帳簿 人混み嫌い

275 273 272 270 269 267 266 264 263 261 260 258 257 255 254 252 251

写生の材料 故郷の写真 莫愁湖 命日 鍋 土膏 退屈 追放 胸中山水 いたずら小僧 相撲 腹立てるな 署名 富士 竹影 鏡 帰る

300 299 297 296 294 293 291 290 288 287 285 284 282 281 279 278 276

春の雨

第百篇

雨の日

雨の日

桐の花

松島の朝

峠

鶴嶋と郭公

浜梨

雷雨

颱風のあと

風呂と雨

虹鱒と犬

じゅずだまの雨

雨の名月

ヨットと雨

ふくろうと雨

雲の上

薄暗い室にて

川のほとり

月白風清

試験される

朝と夜

四十年

はやすぎた

良寛

縄飛禍

藤の花と紙屑

川を掃く子どもたち

颱風一過

投網

狂犬

犬にかまれて

330 328 326 324 323 318 316 314 312 310 309 307 307 303 302

377 373 370 366 362 360 357 354 350 347 344 341 341 337 335 333 332

小

閑

冬の木

私は木が好きである。木を切っているのを見ると、嫌な心持になる。木のある風景が好きである。

庭に大きな木があるが、その枝を私は切ろうとしない。鎌倉に住んでいる楽しみは、遠くから何となく海の香がして来ることと、独特な形の山々に木が多いことだ。四季いつでも美しいと思うが、わけでも私が愛するのは、冬の木の姿だ。葉が落ちて鋭い枝が青い空を突いているのを見ると、心がひきしまるようだ。秋、葉が落ちた木の枝には、すでに新しい芽が用意されている。その小さなふくらみが枝の美しさを増しているように見える。戦争の終った年、焼野原になった東京へ冬がやって来た。さむざむとした街を歩いていると、今迄家並にかくれて見えなかったところにいるいろいろのものがあつた。東京の街には起伏が多い。意外な所に墓があるのに驚いた。また意外に大きな古木が到るところにあった。何十年或は何百年もの間、それらの木々は人に大切にされて、その土地にどっしりと生えていたものである。そういう木には自然に備った風格があり、威厳があつた。しかし、それらも、焼けるがままにしていた戦争の火災から、それぞれ大きな傷手食った。焼野原の中に、半焼けのような状態で立っている古い木は、私を感傷的にした。それはとも角として、私は冬の木を愛し、よく通る路にある、形のよい、風格のある木をすっかり覚えてしまった。秋の終り、それらの厳しい姿の木を見ることは楽しいのでいつも車を徐行した。この数年いつも自分が好きな奴をスケッチしようと思ひながら、いまだに実行していない。寒風の中へ立って、偉容をもったそれらの古木を写生したら、

さぞ楽しかろうと思う。自分がよく写し得るとは考えないが、その仕事に取組むことを思うとひそかに興奮してくるのである。鎌倉と東京の間で汽車の窓から眺めて、惚れている大木が七、八本ある。都内ではやはり、公園や皇室に關係のある土地に立派な木が多い。私は目をとじて木のある風景を思う。もし北京に木がなかったらどうだろう。金沢の兼六公園や鹿児島島の城山にあの古い大きな木々がなかったらどうだろう。そういう沢山の木が集っている立派な景色はもちろん好きだ。しかしそれらは冬になってよけい美しくなるのではない。冬の木の見しさは葉を落して、寒風の吹く青い空に独りで聳えている姿にある。今年もまた冬が来た。毎日木を眺めているながらそれを描かずにいるのは意気がないからだと思う。

火事と乞食

子供の頃、父は、私達兄弟に火事の恐ろしさを教え、ねる時も火事のことを考えて、その用意をしておくように命じた。火事は一年に数回あるか無しであった。夜半に、家人が起き出せば子供の私も起きた。半鐘の鳴っている中を慌しく火事装束をして駆け出していく兄の姿を見送ったことは今も忘れない。冬の夜、一面に雪がある。風もなく、月が雪の上を照している。静かな夜の世界に半鐘だけが鳴っているのだ。厚い着物に着かえて、外へ出た私に、遠い火事の赤い火が見える。がたがた身ぶるいがして、それはなかなかやまなかった。自分の家が焼ける心配もない遠い火事に何故こんなに心を痛めるのか、わからなかった。田舎で暮しているうちに、私は一度も火事を間近に見たことがなか

った。いつでも遠くの夜空を赤く染めている火事、青い空に黒く、また白い煙をあげている静かな火事を見ただけである。そうして、いつでもがたがたふるえた。どうかして焼け跡を通ったときにも、その黒こげになった木材や半やけの家財を見るとふるえ出し、まともに見ることは出来なかった。ところが東京へ来てからは、火事があるとなわざわ見に行くようになった。私が東京へ出てからも浅草馬道や新宿の大火があり、大正十二年の関東大地震の大火があった。そういう大火事をはじめ、近所に起った火事を何十回と見たが少年の頃のような気持は少しも起らなかった。私の育った村には泥棒というものはなかった。家々は戸締りをせず、家に一人も残らずに野良仕事に出たが盗難事件は起らなかったのだ。しかし、乞食はやって来た。彼らが来ると、用意してある白米が与えられた。「乞食の米箱」といって、一斗位入る箱があり、そこからお椀に一杯もって来て与えるのは、私達子供の役目であった。東京へ来てから、乞食をよく見かけたのは戦争前のことである。子供の頃の癖か、私はその前を素通りすることが出来なかった。「不仕合せの人がいるということ、自分の心を不幸にする」という文章を読んで考えこんだのは、東京へ出て来た少年の日のことだ。私の男の子が鎌倉の小学校へ通っていた頃、手拭を落したという。数日後子供達のいつも通る道ばたにその手拭をかぶっているトキスと呼ばれる女の乞食が坐っていた。妹がそれを見つけて、「お兄ちゃんの手拭、トキスがかぶっているわ」といった時、兄は困惑した顔をした。そんなことを二十余年のちの今夜、消防自動車の鳴らす音をききながら思い出した。

戦争中、食糧が少くなると、幼い二人の子供が、食事の時には、何となく仲が悪くなった。腹のへるほど少いわけではないが、満腹感を得られないから、互に人の分が多いのではないかと、うかがうのであろう。私は妻にいつて子供達のために、どんなつまらぬ物でもいいからうんと量を多くしたものを作り、一鉢に盛って食卓に出すようにした。彼らは少し満足らしかったが、戦争という大嵐の中では、一家の小さな工夫くらいではなかなか、食糧難に伴う小事件でも凌げない。結局信州の農村へ行つて彼らはのびのびとした。私は子供の頃十二人という大家族の中で育った。或る日の夕飯の時、鳥鍋が出た。鍋といつても多勢のことであるから、大きな鍋一杯に炉で、野菜と一緒に煮たものである。私はその御馳走に興奮していた。父が苦々しい顔をして私に「うまい物は誰でもたべたいのだ。人のことも考えなくてはいかん」といった。私はがくぜんとして、食事が出来なくなった。兄達は私が父に叱られてすねたと思つたらしい。母は慰め顔をして、さあおあがりといった。その声をきくと私は泣き出した。このことは私を永く苦しめた。小学校の頃私は腕白であった。いつでも威張つていなければ気のすまない、負けぬ気の少年であった。私にはすべてのことが勝ち負けであった。それは氣の弱い、神経質な少年の負つていた不幸であつたように思われる。私の育つた伊那の谷は、東は南アルプス連峰、西は中央アルプス連峰の谷間である。春と秋には遠足があつた。高津谷という山へ同級生と一緒に先生に連れられて行つた。山は美しい紅葉であつた。小さな山だが頂上の眺めはよい。